

ひぐらしのなく頃に 幼隠し編 その 1

橋口トルティーヤ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ただ魅音が幼女に嫉妬するだけですね、

$d \parallel (\wedge \circ \wedge) \parallel b$

魅音の心情は圭一に委ねられる

目

次

1

# 魅音の心情は圭一に委ねられる

昭和58年6月9日金曜日

「きりーつ きよつけ れーい」

「「「ねはようございまーす」「」」

挨拶をしたあと全員席に着いた

そして、授業が始まった

「圭ちゃん！」

「どうしたんだ魅音そんな大声出して」

俺は魅音の元に駆け寄った

「へへ～ここがわからないんだけど教えてくれない？」

なんだ問題がわからないだけか、との問題を見た瞬間目を見開いた

「魅音こんなのがわからないのか!？」

魅音がわからなかつたのは少数のかけ算だつた  
俺が驚いているとそこにレナが駆け寄つてきた

「どうしたの圭一くん？」

そう言つてレナは魅音が解いている問題の答えを見て苦笑いをして自分の席に戻つていつた

「やばいぞ！お前これじやあ高校なんて通れねーぞ！」

「え～！それは困るな～」

魅音が珍しく悩んでいた

そしてたどり着いた答えがこれらしい

「今度私の家で勉強会しない？」

「まあいいけど

「じゃあ決まりだね」

そう魅音はが喜んでいると

「どうしたんですの圭一さん？」

そう言つて沙都子が近寄ってきた

「ん？あつ、いや今度魅音の家で勉強会しようつていう話をしたんだ」

「いいですわね、わたくしたちも行つていいですか？」

「そうだな魅音、沙都子たちも誘つていいか？」

「ん……いいよ」

そう言つたとき魅音は顔をそらした

「じゃあ梨花ちゃんも来るつていうことでいいんだな」

「はいなのです、僕もいきますのです」

それじゃあレナも誘わないと

「レナーお前も来るか？」

「えつ、そんなに行つても迷惑じゃないかな？」

そう言うと

「あ、ああ大丈夫、大丈夫私がちゃんと言つとくから……」

そう言つたときレナは少し表情を明るくして言つた

「それならレナも行くよ」

「よし！ それじゃあ決まりだな」

そう喜んでいると頭に衝撃がわたつた  
ベシツ！

「圭一さん、そういう話は授業中にすることではありません」

そう言つてクラスの皆が大声で笑つた

なんで、レナたちもくるんだろう？

今回は圭ちゃんだけを誘つて一人で勉強しようと思つていたのに、特に沙都子と梨花ちゃんは遠慮位してほしかつた。くそつ！ 全部あいつらが悪いんだ！！

次の日

「おう！ 皆揃つたか？」

「全員いるよ！」

「遅刻しないようにちゃんと早く来たんですよ」

「みー、早く中にはいろいろなのです」

園崎家の門が開いて魅音が出迎えてくれた

「全員揃つてるね、じゃあ皆入つて」

敷地内に入るとやはり思う

「魅音の家つて」

「やつぱりでけー！」

そう言うと魅音の顔が一気に緩んで

「でっしょー！やつぱ圭ちゃんさすがだねー」

そういうながら入つていった

ネタキレタ